



# 井原市民病院だより

No.32

井原市の花 パンジー

2016年2月発行

日本医療機能評価機構 病院機能評価 3rdG:Ver1.0 認定

## 地域とともに歩む、 より愛される病院を目指して



### Mission (使命)

地域住民の尊厳を守り、命を守り、  
健康増進を支援する

### Vision (将来展望)

いつでも安心してかかる、  
身近で愛される急性期病院

### 今年のスローガン

思い込みをなくそう

Ibara City Hospital

## 井原市立井原市民病院

〒715-0019 岡山県井原市井原町1186番地  
TEL 0866-62-1133(代) FAX0866-62-1275(代)  
E-mail byoin@city.ibara.okayama.jp

### 診療科目

内科・循環器内科・外科・消化器外科・整形外科・眼科  
小児科・脳神経外科・放射線科・麻酔科・耳鼻咽喉科  
リハビリテーション科・婦人科・泌尿器科・皮膚科

発行責任者：山田 信行

# 思い込みをなくそう

院長 山田 信行



新年明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては、新たな抱負を持って新しい年をお迎えのことと存じます。市民ならびに職員の皆様方には日頃から井原市民病院の運営につき格別のご理解とご協力を

賜り厚くお礼申し上げます。

昨年は大村智・北里大学特別栄誉教授のノーベル医学生理学賞受賞と梶田隆章・東京大学宇宙線研究所所長のノーベル物理学賞の受賞で、世の中の沈滞ムードを吹き飛ばすような明るい出来事に明日の活力をもらいました。とりわけ大村先生の生きかた、自然・他の生物を敬う謙虚な気持ちには心を動かされました。一方、テロ事件、銃乱射事件、いじめによる自殺・殺人、介護苦に伴う自殺・殺人、子供の虐待死、群馬大学病院の相次ぐ術後死亡など痛ましい出来事も多く、人の命をあまりにも軽く考える風潮に心を痛めるとともに、社会制度や教育などの不備を改めて考えさせられた一年でした。

当院での出来事を振り返ってみますと、1月：CTを高性能機種（東芝製 320 列 Aquilion ONE）に更新。3月：細羽 俊男副院長が定年退職。8月：金 仁洙参与が就任。10月：病棟再編（地域包括ケア病床を 25 床から 45 床の一病棟に）。11月：第 5 回井原市民病院健康まつり（参加者約 900 名）を開催。12月：3 人の地元出身画家のご好意により多くの絵画を寄贈・寄託していただき、美術館病院を実現。次のステージへのスタートとなった一年でした。

さて、今年の当病院のスローガンですが、『思い込みをなくそう』にいたしました。理由は二つあります。①医療安全・事故防止と、②業務改善の取り組みを積極的に図ってほしいからです。

自明のことですが、医療行為には常に危険が伴い、リスクのない医療は存在しません。1999 年に米国で「To Err is Human(人は誰でも間違える)」と題した有名な報告書が発表され、医療事故死の多さに驚愕した医療界は、以来、“間違いは誰でも起こす”ことを前提に、一連の医療行為の中に最終的には医療事故につながらないように幾重にもチェック機能が働くような仕組みを構築してきました。しかし、最初の段階での思い込みによる一つの間違いが、幾つものチェック機能をすり抜けて患者さんに実施されてしまう事例は、日本医療機能評価機構 医療事故防止事業部の報告をみても、依然として数多く起こっています。安心・安全な医療の提供が医療の質の根幹をなすことは言うまでもなく、「命に直結しなかったからいいではないか」では決して済まされないことです。思い込みをゼロにすることは、難しいことですが、医療の現場では一つの思い込み、間違いが命に直結することがありうることを常に考えていかなければなりません。『思い込みをなくそう』の言葉を自らに投げかけつつ、原点に立ちかえって考え直す一年にしたいと思います。

また、日常業務や決まりごとにしても、すでに時代にそぐわなくなったにもかかわらず、これで良いと思い込み、深く考えることなく慣習として漫然と行っていることはないでしょうか。改善すべきことは本当はないのでしょうか。今一度考え直してみる一年にしたいと思います。

今年は申年ですが、「見ざる、聞かざる、言わざる」ではなく、「よく見て、よく聞いて、よくしゃべって（コミュニケーションをよくとって）」、良いことは積極的に真似していきたいと思っています。

今年が皆様方にとって良き年でありますように祈念致しますとともに、引き続き地域に密着した、より愛される病院を目指しますので、皆様方の一層のご支援・ご協力・ご指導をいただきますようお願い申し上げます。

## 外来診療科からのお知らせ

### ◇内視鏡検査（大腸内視鏡検査）

平成27年12月より、毎木曜日・午後、チクバ外科病院より医師の派遣をいただき、大腸の内視鏡検査枠を増設しています。

従前からの岡山大学病院及び当院医師により毎週 火曜日、木曜日、金曜日を中心に行っております。検診結果等で精密検査が必要な方など、お気軽にご相談ください。

## 地域包括ケア病棟（3階病棟）の紹介

看護師長 内山 嘉子

国は2025年を目途に今後増え続ける高齢者が、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供されるシステムの構築を目指し、平成26年4月より、厚生労働省の診療報酬改定で急性期医療とその後の亜急性期医療を充実させる目的で地域包括ケア病棟が新設されました。制度化された地域包括ケア病棟は「ときどき入院、ほぼ在宅」の社会を実現するために今後の地域社会で大きな役割を果たすものとして注目を集めています。

当院においても平成26年5月より一般病棟のうち25床を地域包括ケア病床として開設、平成27年10月からは3階病棟（45床）を地域包括ケア病棟として届出、運用しています。

通常では急性期治療を終了し、病状が安定すると退院になりますが、急性治療を終了して症状は改善、安定したが主に在宅あるいは介護施設等に復帰予定で、もう少し経過観察が必要な方、在宅復帰に向けてリハビリテーションが必要な方、在宅療養の準備が必要な方に対して主治医、看護師、リハビリスタッフ、ソーシャルワーカー、その他メディカルスタッフが協力して復帰支援を行い、在宅復帰を目指す病棟です。

また、在宅や施設で療養されている患者さんが憎悪時（肺炎や脱水、けがなどリハビリを重視した入院加療が望ましい方）の対応や日常生活動作向上のためのリハビリが必要な方の安定した療養生活の支援も行っています。

現在、看護師20名、看護補助者13名で多職種と連携をとりながら、積極的にリハビリに関わり、歩行訓練の補助、月1回の機能訓練を意識したレクリエーション、できるだけ車椅子に乗車して食べていただくなど、自立生活動作の維持、改善を目的に看護、介護を行っていま

す。また、摂食・嚥下機能に問題があり、十分に食事が摂れない患者さんの摂食・嚥下機能の評価・改善、また嚥下機能の低下に応じた食事形態の選択など管理栄養士、リハビリ担当者とともに取り組んでいます。

このように患者さんの状態を多職種で評価し、退院に向けた在宅復帰支援計画を作成し、常に情報を共有し患者さんの状態や生活環境に合わせて、看護や介護のコツを具体的に指導しています。ご家族への自立支援としては、患者さんが住み慣れた自宅で療養生活が送れるように必要に応じてまた、介護者に応じて指導させていただいています。

現在、当病棟の入院は脳卒中、肺炎、骨折の手術後などの患者さんが多く、入院期間は状態に応じて検討していきますが、転院、転棟より60日以内が原則となります。

看護師は早期に退院後の生活を視野に入れて、退院後はどう暮らしたいのか、どうなりたいのかなど、患者さん、ご家族の思いをお聞きしながら意思決定を支援、「その人らしく」の生活が送れるよう安心、安全な退院に向けて支援しています。患者さん・ご家族の思いに寄り添った退院支援ができた時こそ、喜びと達成感を感じる瞬間です。これからも笑顔で生活の場へ戻れるように病棟スタッフ一同、井原市民の皆さんにとって最も必要とされる病棟として、さらに、今後も地域の医療・介護全体をつなぐ病棟として健やかな生涯を支えていきたいと思っております。



## 外来ホール、病棟に郷土の洋画家作品を展示

事務次長 中原 康夫



この度、井原出身の洋画家 倉橋 英男氏、森 昌俊氏のご家族、三宅 興太郎氏ご本人のご厚意により、大切な作品をご寄贈・ご寄託いただきました。

金 参与の福山市民病院での取り組みを参考に、病院は『患者さんやご家族の癒し空間に』との発案で、三宅先生、倉橋先生のご長男 俊彦氏、森 先生の奥さま 妙 氏に打診したところ、ご快諾いただき、ご寄贈・ご寄託の運びとなりました。御三人の57作品を平成27年12月1日から外来待合ロビーや各階の廊下、病棟の談話室等に展示して

おります。

また、12月24日には3氏を招待し、山田院長から感謝状を贈呈、3氏からは井原の洋画活動についての話を聞くことができました。引き続き、来院される方々にとって癒しの一助となるよう努めたいと思っております。





団塊の世代の方々が75歳をむかえる2025年に向けて、現在日本全国で「地域包括ケアシステム」の構築が進められています。この「地域包括ケアシステム」とは、地域住民に対して、保健サービス、医療サービス及び在宅ケア、リハビリテーションなどの介護を含む福祉サービスを、関係者が連携して、地域住民のニーズに応じて一体的、体系的に提供する仕組みです。当院においては、平成26年5月から地域包括ケア病床(25床)を開設し、急性期医療を終えた患者さんや、在宅等で加療されている患者さんの急変時等の受け入れを行っているところであります。

この度、備前市病院事業管理者 萩野健次 先生から井原市民病院でのこの取組みを発表する機会を与您いただき、平成27年11月15日(日)に開催された第52回岡山県国保診療施設研究発表会にシンポジストとして出席、発表してまいりました。

岡山県内の国保診療8施設のスタッフの方々による研究発表、京都大学名誉教授・日本カトリック医師会会長 人見滋樹 先生による特別講演に続き、パネリスト4名によるシンポジウムが行われ、「超高齢社会を支える地域包括医療・ケア」のテーマのもと「地域包括ケア病床運用と見えてきた課題」と題して当院の取組みの発表を

行いました。

井原市は人口約4万2千人、高齢化率約34%で医師並びに医療資源が不足しており、近隣地域にある大病院へ急性期治療を依存せざるを得ないといった市の状況報告を行った後、井原市民病院の現状や取組みを紹介しました。なかでも、井原市ではまだ準備段階である地域包括ケアシステムについて、地域ぐるみで在宅復帰支援の基盤を作ることができるよう、井原市民病院を中心として行政・施設・介護関連との連携ツールとして、医療介護ネットワーク『まいづる連携』を立ち上げ、関係機関を巻き込んだ顔の見える連携関係を構築出来たことに関しては多くの方が関心を持たれているようでした。最後に、これらの井原市民病院での取組みにより、「井原地域での地域包括ケアシステム実現のための第一歩として踏み出すことができたのではないかとしめ、発表を終えました。

今後、院内の各職種の垣根を越えたチーム医療の基盤を今まで以上に強化し、患者さんの為に努めてまいりたいと思います。

当日は市民病院主催の『井原市民病院健康まつり』と日程が重なり、写真提供については瀬戸内市民病院 馬場洋一事務局長様にご協力をいただきました。紙面をお借りしてお礼申し上げます。

## 「第54回全国自治体病院学会 in 函館」

副看護部長  
地域医療連携室長 渡邊 栄子



平成27年10月8日(木)～10月9日(金)、第54回全国自治体病院学会が北海道函館市で開催され、当院より4演題をエントリーしました。

会場は函館市民会館、函館アリーナ、花びしホテルの3会場で、当院の発表者は、4題とも函館アリーナでの発表となりました。超大型台風23号が北海道に接近するなか、無事発表を終え、帰院することができました。

当院の発表は次のとおり。

- 井原地区における大腿骨頸部骨折の治療の実態  
～井原市民病院の今後の対応～  
診療部長 平田 哲男
- 320列CTにおける冠動脈サブトラクションソフトの使用経験  
放射線科長 中村 博行

- ICT活動による緑膿菌薬剤感受性率の推移について  
◎田中達也, 太田直樹, 柳本亜由美, 太田みゆき  
高山二郎 (ICTチーム)
- 地域の中核病院から始める地域連携活動  
～地域包括ケアシステム構築を目指して～  
◎渡邊栄子, 三宅伊沙子, 富田愛子, 渡辺真澄  
(地域医療連携室)



平成27年10月1日から医療事故調査制度が施行されました。多くのところでセミナーや研修会が開催されていましたが、参加できる人員も限られ、新しい制度ということもあり、10月14日(水)、森脇法律事務所の森脇正先生、山根務先生を講師として迎え、院内職員研修会を開催しました。当日は地元医師会及び近隣医療機関にも声かけし、院内外から131名の参加がありました。

初めに山根先生から制度の目的と概要を、続いて森脇先生から事例を踏まえ現場の課題についての話がありました。

本制度は、医療安全の確保のための医療事故の再発防止を目的とし、届出の対象は『医療に起因する(と疑われる)死亡・死産で、管理者が予期しなかったもの』であり、調査の具体的方法はカルテなどの記録確認、ヒアリング、解剖、AI(死亡時画像診断)などである。ま

た、遺族への説明は医療事故調査・支援センターより先にすべきなど重要なポイントの説明がありました。

また、森脇先生からは、① 転倒・転落、② 問題患者、ハラスメント、③ 認知症にかかわる課題、実際の事例を織り交ぜながら説明され、「転倒」と「転落」は区別して記録すること、記録は客観的事実を詳細に記載すること、日頃から時間(時刻)を院内合わせておくことなど、記録の重要性についてお話されました。

職員一人ひとりが医療安全の必要性、重要性を認識し、日々業務を遂行することが求められ、今後も安全な医療の提供に努めてまいりたいと考えております。



## 第4回ICTオープンカンファレンス

感染管理認定看護師  
主任看護師

柳本 亜由美

地域医療圏内の皆様と感染対策に関する情報共有・啓発を目的とし、当院では定期的にICTオープンカンファレンスを行っております。

乳幼児から高齢者に至るまで、幅広い年齢層に感染し、嘔吐・下痢などを引き起こすノロウイルスですが、今シーズン新規遺伝子型のノロウイルスが流行する可能性がある



ると国立感染症研究所が発表しました。これを受け、適切に感染対策を行えるよう「新型ノロ!?もう一度振り返ろう感染対

策の基本」をテーマに11月4日、第4回オープンカンファレンスを開催しました。

ノロウイルスは非常に感染力が強く、アルコール消毒が効きません。また、何度でも感染を起こし、有効なワクチンもないため、とにかく手洗いをすることが重要であることを学びました。嘔吐物が落下地点から半径約2mもの広範囲にウイルスを含む粒子として飛び散ることには驚きました。嘔吐した場合は、半径2m位の広範囲を拭き取り、消毒することが感染拡大防止に繋がると思いました。

今回も、院内外から167名の参加がありました。カンファレンスで学んだことを施設内・家庭内で実践し、ウイルス感染することなく過ごしたいと思っております。

## 平成27年度 院内接遇研修

接遇委員会 委員長  
看護部長

池田 悦子

平成27年11月27日(金)、院内全体研修を行いました。昨年度と同じ金田病院(真庭市)フロアマネージャーコンシェルジュの細田麻衣子先生を講師としてお迎えしました。今年は「接遇は医療安全の第一歩」と題し、参加人数120名での研修となりました。

細田先生手作りの意思表示カードを用い、お互いに意思表示をしながら受講しました。「第一印象を大切にすること」、「身だしなみや表情から伝わる重要なこと」など医療接



遇の重要性をふんだんに盛り込んでいただきました。病院業務に欠かせないマスクは着用すると顔の半分以上が隠れてしまいます。マスク越しでも感じのよい表情は「あごの位置」「目の表情」といった工夫次第で作れることなど実際の写真を元に実例を学びました。「職員同士の呼びあい方」、「クッション言葉の使い方」といった言葉遣いは翌日からの業務においてすぐに実行できるものでした。

接遇は医療になくてはならないスキルです。地域の人たちから信頼される病院になるためにもっと接遇力を高めていきたいと思っております。



今回 11 月 9 日から 13 日までの 5 日間、井原市民病院で実習をさせていただきました。充実したスケジュールを組んでくださり、外来見学やカンファレンスへの参加、訪問看護に同行させていただくなど、さまざまなことを経験させていただきました。今回の実習に来るまでは地域の病院がどのような状況で、またどのようなことを実際行なっているのかあまり詳しく知りませんでした。しかし今回の実習を通して、地域の病院の役割の大切さや医師数の不足など、さまざまな地域の病院の現状や実際を知ることができました。特に地域の病院では都市の大病院とは違い患者さんの病気を治療して終わりなのではなく、患者さんの生活や社会環境を踏まえた患者さんの QOL の向上や、患者さんにとっての幸せは何かということを考えて包括的な医療がなされていて、高齢者の方が特に多い地域ではこういった患者さんの全体を診るという医療が特に必要とされており、また地域の病院の大切な役割の 1 つなのだなと感じました。そしてそのような医療を実現するためにも、さまざまな職種の医療従事者の方が一丸となって努力されている姿がとても印象的でした。退院カンファレンスや NST 委員会にも参加させていただいたのですが、さまざまな医療従事者の方が集まって患者さんの病状や今後の方針について情報共有し、意見を出し合われているのを見て、

こういったチーム内での努力やチームワークが今の患者さん中心の医療の実現につながっているのだなと実感できました。また他にも印象に残ったことが朝の外来診療を始める際の山田院長、看護師長、受付の方による患者さんに向けての全体挨拶です。挨拶は患者さんとのコミュニケーションや信頼関係を築く中でとても大切なことであり、挨拶をすることによって患者さんも気持ちよく安心して診療を受けられているのではないかと感じました。外来見学や回診、訪問看護や訪問リハビリへ同行させていただいた際も、医療従事者の方の患者さんを思う気持ちが 1 つ 1 つの細やかな配慮につながっていたり、患者さんとの信頼関係につながっていたりと患者さんとのコミュニケーションについても学ぶことができました。患者さんに寄り添った医療が提供できる地域医療はその人の人生をよりよくするお手伝いができるとてもやりがいのある仕事だなと感じました。5 日間を通して、地域医療の大切さやチーム医療の大切さ、またコミュニケーションの大切さについて学べたことがとても良い経験になり、これから医師になるにあたって患者さんとの信頼関係を築き、患者さんに寄り添った医療を提供できる医師になりたいと思いました。

最後になりましたが 5 日間お忙しい中、山田院長をはじめ多くのことを教えてくださり、協力して下さった井原市民病院のスタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。短い間でしたが本当にありがとうございました。

## まいづる保育園だより

### 「ハロウィンパーティー」 .....



11月6日に今年初めてのハロウィンパーティーをしました。最初に製作として、魔女の帽子やシルクハット、マントを作りました。

出来上がるとお父さんやお母さんに帽子やマントを付けてもらい、可愛い魔女やドラキュラに変身!

その後、お父さんやお母さんと一緒に“おばけ探しゲーム”をしたり、保育士手作りのパンプキンケーキを食べたり、とても楽しい時間を過ごすことができました。

### 「クリスマス会」 .....

12月25日、保育園でもクリスマス会を行いました。サンタクロースの衣装を着て「あわてんぼうのサンタクロース」の曲に合わせて、可愛い踊りを披露したり、手作りのマラカスやトナカイの楽器を持って、みんなで合奏もしました。たくさんの保護者の方の前で緊張して練習どおりにできなかった子もいましたが、保護者の方には喜んでいただけたのではないのでしょうか。

クリスマス会の最後には、保育園にもサンタクロースがプレゼントを持ってきてくれました。サンタクロースに会えて喜び、ビックリして泣いてしまう子と様々でしたが、サンタクロースから直接プレゼントを貰って嬉しそうな子供たちでした。



# 第5回井原市民病院健康まつり

庶務係長 藤本 勸

平成27年11月15日(日)、今年で第5回となる井原市民病院「健康まつり」を開催いたしました。健康まつりは、地域に開かれた身近な病院を目指し、健康の大切さを地域住民とともに改めて考え、市民病院をより理解していただくことを目的に開催しています。今年はいくまで最高の約900の方が来院してくださいました。

山田院長の挨拶ではじまり、特別講演として、笠岡第一病院 栄養管理科長 安原 幹成 先生をお迎えし、「井原市民が安心して過ごせるために～食生活を改めて健康で長寿」と題してご講演いただきました。

また、今年はいくまで井原消防署に協力していただき、5階病棟からの出火を想定し消防訓練を実施し、はしご車を使つての救出訓練を行いました。見学された方々は、はしご車のスケールに圧巻されていました。

各種体験コーナー・催しは大盛況で、最後は病院職員有志による「井原☆まんてん」踊りで閉会しました。今回も多くのの方々にご協力をいただきました。紙面をお借りして心よりお礼申し上げます。



## 特別講演

「井原市民が安心して過ごせるために  
～生活習慣病の克服を目指して～」



## 反重カトレッドミル

## はしご車による救出訓練



## 出部保育園による鼓笛演奏



## 赤い羽根募金(社会福祉協議会)



## ホール

多数の方に来院いただきました



緊迫した空気と迫力満点



## 放射線科 箱の中身はなんじゃらか?



## スポーツドリンクづくり お菓子の分包



## でんちゅうくんが登場!

血圧脈波測定  
推定血管年齢を調べてみよう



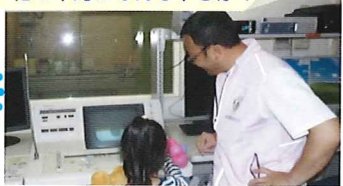
## なりきり看護師さん

## リハビリテーション科 揺れる?! バランス測定



井原高校生  
ボランティア  
も応援

多くの方にお  
待ちいただき  
ました



## 市役所職員有志によるバルンアート

## 健康教室のご案内

開催日：毎月第3水曜日 時間：11時30分～12時 場所：玄関ロビー  
 3月16日(水)「認知症の人とともに」 担当：看護師  
 4月20日(水)「大腸の話」 担当：看護師

○事前申し込みの必要ありません。  
 どなたでも参加いただけます。

## 糖尿病教室のご案内



◆開催日：第1水曜日 11時30分～ ◆場 所：玄関ロビー

3月 4日(水)「低血糖の症状と対策」 担当：薬剤師  
 4月 6日(水)「糖尿病の運動療法について」 担当：理学療法士  
 5月 11日(水)「糖尿病とどう向き合う？」 担当：看護師

○糖尿病昼食(400円)希望の方は2日前までにお申し込みください。  
 ※食事が不要の方は事前申し込みは必要ありません。



問合せ・食事申込：井原市民病院 内科外来 62-1133(代)

## 医療安全週間 医療安全標語 優秀作品

医療安全管理室

医療安全週間(11月22日～11月28日)の活動として、各部署で医療安全を考える機会を、職員・患者への安全に対する啓発活動を行うことを主旨とし、今年度は「医療安全標語」に取り組みました。総数154題の応募があり、職員の投票により次の7題が選ばれ、12月16日(水)職員互助会忘年会において表彰されました。選ばれた優秀作品を紹介いたします。

### 院長賞(2題)

見たつもり つもり積って 事故になる

リハビリテーション科 神田 裕一

記憶より 記録に残して 備えよし

庶務課 立石 延代

### 副院長賞(2題)

思い込み 自己判断が 事故のもと

4階病棟 吉岡 真希

声掛け合い 笑顔と信頼 チームの和

3階病棟 鈴木 麻由

### 看護部長賞(3題)

くえすちよん? 感じた瞬間、報・連・相

リハビリテーション科 中島 均

言いあえる 環境づくりで チームの輪

3階病棟 立花 叔美

「確認」が 患者を守り 身を守る

参与 金 仁洙

## おすそ分け

あべ こうぞう

みなさんは「おすそ分け」ということをご存知ですか。今でも言ったりして都合良く使っておられますか。この「おすそ分け」を国語辞典で引いてみますと、「御(裾分(け))」とあり、その意味は「よそからもらった物や利益などの一部を、知合いに分けてあげること」とあります。また最近の新聞には、もらい物や利益を更に他の人に分け与えることとありました。私も子供の頃は親戚やご近所さんからおすそ分けとして、食べ物を頂いていました。お土産や自分の家で作ったおもち、おはぎや焼き芋、また採(獲)れた果物、野菜、魚などでした。物が豊富でなく困窮の時代ではお互いに普段食べていない珍しい物や早々に採(獲)れた物がそうであったように記憶しています。多くの物が容易かつ潤沢に手に入り、また人との繋がりが希薄な個人主義的・利己主義的な現代においては、良い意味でも、そうでない意味においても「死語化」しているかのよう言われ・思われているようですが、果たしてどうでしょうか。

その「お土産」ですが、おすそ分けと言えるかどうかは別として、家族だけでなく、親しい人などにも買ってきます。ご近所さんへはどうでしょうか、最近では昔ほどではないのかも。一昔前はお接待や嫁菓子、婚礼や仏事のお下がりがあり、行き来があったようで今でも地域によっては残っているようです。

こうして改めて「おすそ分け」の意味や行為をみますと、メディアが言っている程希薄ではないように思います。やはり人々との繋がりは、人本来の真心として厳然と持っているものなんですね。

昨今は、「自助・公助・共助」が盛んに言われていますが、公助・共助の始まりは隣近所の挨拶とおすそ分けから始まるのでしょうか。今一度、改めておすそ分けの良さを行動に移してみてください。